

研究ノート

「成熟」のための人生の風景
—老いを受けとめ、愛に満ちた死に向かって—

村 上 則 夫

長崎県立大学論集（経営学部・地域創造学部）

第55巻 第3号 抜刷

令和3年12月発行

「成熟」のための人生の風景

—老いを受けとめ、愛に満ちた死に向かって—

村上 則 夫

構成

1. 諸 言
2. 成熟した人間への静思
 - 2-1. 「成熟」という言葉をめぐって
 - 2-2. 成熟した人間の生き方とは
3. 「老い」を受けとめる —老いるということ—
4. 成熟に向かったの老いのあり方
 - 4-1. 「老い」と精神的な成熟
 - 4-2. 成熟に向けて可能性を呼びさます
 - 4-3. 2つの「S」—老いたものの奉仕と献身—
5. 死にゆくものの覚悟とそなえ
 - 5-1. 死と向き合い恐れずに人生を生きる
 - 5-2. 愛に満ちた覚悟の死 —後に残されたものへのいつくしみ—
6. 結びに代えて —結 言—

1. 諸 言

「老い」とは、「喪失^{そうしつ}」ではなく、「成熟」である。

年を重ねるにつれて、季節の変化に心を動かされるようになった。年齢と共に、自然の変化と人生に起こる変化が不思議と重なりあい、秋の収穫や実りの季節を通り過ぎて、やがて迎える人生の「冬」の季節の中で、〈いのち〉を美しく輝かせたいという希望がますます強くなっていく。

人生の「秋」から「冬」の季節（老年期）は、悔やむことのない「死」への覚悟とそなえ（準備）の期間でもある。

子どもの絵本の解説程度の表現を用いれば、〈生〉とは、「生」まれること、「生」きること、そして、「生」き続けること、である。〈生〉に忠実に生き続けることこ

そが、人生に与えられた課題といってよい。そのような課題に取り組むプロセスにおいて、誰も、人生の絶頂期から突然、なんの予告なしに〈死〉を迎えるわけではない。後戻りできない〈死〉の前に、長い老年期、すなわち「老い」の期間を通過しなければならない。

老年期に入ると、若い頃のような無謀な勇気も、がむしゃらな意欲も、そして不可能を可能にしてしまう希望も、いつの間にかそれらが遠い景色にみえてしまう。老いを受け入れることは、過ぎさった過去をくやみたくなるような、敗北を認めるような、悲しさとさみしさがある。

それが、ほんとうに、老いるということかもしれない。「かけがえのない自分らしさ」という〈生〉の実感を失ってしまうのではないか、という悲観的な、いわゆる「焦燥感」^{しょうそうかん}に襲われる場合もある。勇気と意欲と希望を失うことは、無駄に老いを加速してしまいかねない。

しかし、それが「老い」という現実だと、簡単に、さみしく、悲観的に受け入れるわけにはいかない。人生の完成に向かって成熟していくプロセスの中で、「老い」というものが苦しみや悲しみ、孤独やいかりとして設定されているとすれば、それはなぜだろうか。

「老い」は、長寿のざんねん賞でも、まったくの無駄なオマケでもない。老人性うつ病を克服した作家の森村誠一氏はいう。「枯淡の境地」と聞こえはよくても、言い換えれば古木の世界である。六十歳、七十歳という年齢であればまだ樹液はしっかり残っており、まだまだ花も実もつけられる。その段階で自分から枯れていこうというのは、もったいなさすぎる」¹⁾と。

確かに、あえて極端に言えば、心が枯れば、大切な人生を手放したことになるはしないだろうか。筆者は、還暦を過ぎて、人はどのように生き、どのように死んでいけばよいのかを考えずにはいられない。本当に、〈生〉を知り、〈死〉を知ることにはかなうのだろうか、と思わずにはいられないが、生きることを焦る必要もない。

みずからの「死」というものをしっかりと自覚しなければ、「老い」をより豊かに、意味ある時として生きぬく覚悟もおぼつかない。

今回の愚稿でも、そのようなことをあれこれ考えているうちに、「老い」を真っ向から受け止め、やがて待ち受ける死を真正面から見据え、しっかりと覚悟し、それを恐れずに人生をより豊かな気持ちで、積極的に「自分らしく」よく生きるには、どのような人生への姿勢が必要なのか、を問いたくなり、心のおもむくままに、ひとつも飾ることなく、拙い風景画を描くように表現したものである。

したがって、これまでの愚稿と同じく、研究ノートというよりも、かなり思いつ

きのとりとめもないような“随想メモ”程度の内容であることはいうまでもない。大学の『論集』に寄稿できるような客観性も、科学的な内容でもないが、やがて、筆者もいつかは死ぬのだから、それもひらにご容赦願いたい。

2. 成熟した人間への静思

2-1. 「成熟」という言葉をめぐって

「成熟」という言葉を定義づけるのは、容易ではない。

百科全書的な解説は簡単だが、「成熟」を定義づけるのは、簡単なようで、実は意外とむずかしい。

自然界の営みをみれば、秋になって、自然の果物や穀類がたわわに実り、田畑の作物が収穫されるばかりになっている状態である。読者もご存じのことと思うが、渋柿をそのままにしておくと、いずれ甘い味に変化する。まさしく、そのような状態、または、樹木の葉が紅葉した時期や状態が自然界の「成熟」と考えることができるであろう。

では、人間の場合はどうであろうか。「成熟」した人間とは、当然ながら身体的に成熟した人間というのではなく、心理的・精神的に成熟した人間であり、人間としての人格的な成熟を意味する。

中国を語源とする言葉の中で、日本でも良く知られ、時に語られるのが「君子^{くんし}」あるいは「聖人君子」という言葉である。

ご承知のごとく、「聖人君子」とは、古代中国において理想的な人格者で、徳が高く誰からも尊敬され、すぐれた学識をもつ理想的な人物を指している。厳密には、「聖人」がこの上もなく偉大で高貴なる崇高^{すうこう}な人物で、その次に位置づけられるのが「君子」のようであるが、日本では、「聖人」と「君子」を組み合わせ、^{かん}「まったく非の打ちどころのない、これ以上に優れた人物は存在しない、と考えられる完璧^{ぺき}な人格者」という意味あい^{かん}で用いられている。

この「聖人君子」の類語としては、「聖人賢者^{うんちゆうはつかく}」、あるいは「雲中白鶴^{うんかん}」、「雲間^{のつる}乃鶴」という言葉である。「雲中白鶴」や「雲間乃鶴」という言葉は、日本ではあまりよく知られていないように思えるが、雲中の白鶴とは、直接的な意味としては、「雲の中を優雅に飛ぶ白鶴」ということである。世俗を超越した品性のすぐれた高潔な人物に対して、雲の中を飛ぶ鶴にたとえたもので、心があくまで清らかで気高く立派な人物に対してもちいられる表現である。

なお、「聖人君子」の対義語としては、「蕩児愚人^{とうじぐじん}」や「凡愚^{ぼんぐ}」などが知られてい

るが、いずれも、日常会話の中では用いることはないだろう。

「精神的に成熟した人間」イコール「聖人君子」と考えたとすれば、成熟した人間を探し出すのは、さほど容易ではなさそうである。ここでいう精神的な成熟とは、いのちを愛し、人をゆるし、自己犠牲をもいとわない、草木の葉が「紅葉」したような豊かな人間性を備えた円熟した心の境地に達した人とでもいえるだろうか。したがって、偉大で高貴なる崇高な特別な人間ではなく、みずからの心のあり様で、誰もがそこに向かうことのできる人間の領域なのである。

「年輪」とは、あえて説明するまでもなく、樹木の切り株などの横断面にみえる同心円状の「輪」のことである。

樹木は春から夏にかけてはやく大きく成長するが、この時期には柔らかい細胞ができて色があわい厚い層が形成される。そして、夏の終わりからは比較的ゆっくりの成長となり、硬い細胞ができて色の濃い薄い層が形成され、この細胞の密度の違いが「年輪」となってあらわれる。

この木の年輪を数えると「樹齢」がわかるが、同じ気候や同じエリアで育つ木であっても、異なる樹種では育ち方がまったく異なってくる。たとえば、スギとヒノキでは木の太くなるスピードが違い、スギの方がはやく太く成長し建築用材として利用することが可能になるという理由から、戦後、日本ではスギが計画的に植林されている。

建築の専門家によれば、同じ樹種・同じ寸法（太さ）の木材でも、厳しい環境の中でゆっくり成長して「年輪」のつまった木の方が、木材として強度があり、目でみて美しく、ねじれの狂いも少ないことから、建築用材として重宝されるとのことである。

樹木の年輪は、春夏秋冬という「四季」によって形成されることになるが、明確な四季ではなくても、雨季・乾季などがある国で育つ木には年輪が形成されるものの、四季のない温帯で育つラワンなどの木には「年輪」を確認することができない。

比喩的に、「技や芸などを積み重ねること」を「年輪を重ねる」ともいうが、それは、飛躍的に技や芸などが身につく時期と伸び悩む時期を繰り返しながら、次第に技や芸などが美しく洗練されていくからであろう。

私たちの人生においても、いろいろなことが思い通りにスムーズにいく時もあれば、時には厳しい状況におかれて、何をやってもうまくいかない時を経験させられる。

しかし、まったく前進できないように感じられる時でも、その人の内に着実に益のある層（＝硬い年輪）がつくられ、そのような日々の積み重ねと月日の流れが、

強く、美しく、そしてねじれやゆがみの少ない精神的に成熟した人間へと成長させてくれるといえるのである。

またさらに、自然界の営みの中で、たとえば、“小鳥”のような細やかな姿と、鳥の王者である“鷺”のような、ゆったりとした姿との比較において、「成熟」をイメージすることもできる。

一般的に、鳥の飛び方には、大きく分けて二つの方法がある。一つは、小型の鳥にみられるような、つばさを規則的にはばたいて飛ぶ「はばたき飛行」であり、もう一つは、タカやワシなど大型の鳥のように、つばさを広げたままで、すべるように飛ぶ「滑空（グライディング）」という飛び方である。

青年期など若い時分は、小鳥のように、常に時間に追われていそがしく、細やかに神経を使い、何をするにも余裕もゆとりもない、身体を駆使する毎日に明け暮れる人生の時を経験する。むろん、それは、決して悪いことではない。しかし、ある程度の年齢を重ねてからは、上昇気流を利用して高く飛びうまく風に乗って、余裕もゆとりもうまれ、心もゆっくりと、ゆうゆうとしている鳥の王者のような飛び方を思いながらの心持へと、人生の過ごし方も変わってくる。それもまた、精神的な成熟のあり方としてイメージすることができるだろう。

生前、ノートルダム清心学園理事長などをされていた渡辺和子氏は、著書『置かれた場所で咲きなさい』の中で、「肉体的成長は終わっていても、人間的成長はいつまでも可能であり、すべきことなのです。その際の成長とは、伸びていくよりも熟していくこと、成熟を意味するのだといってもよいかもしれません。不要な枝葉を切り落とし、身軽になること、意地や執着を捨ててすなおになること、他人の言葉に耳を傾けて謙虚になることなどが『成熟』の大切な特長でしょう」²⁾と述べている。

人間としての大きな魅力のひとつは、長い人生の旅の中で、その時々いろいろな変化、立ち止まりや成長・発展に向きあうことによって、あざやかに、豊かな人間性を魅力的に醸し出すことができる場所にある。精神的な成熟というのは、どんなに年齢を重ねても遅いということはないのである。

むろん、人間が年を重ねたからといって、無条件に誰もが精神的な成熟に到達するというわけでもないかもしれないし、逆に、年齢が若いからといって精神的な成熟には程遠い、というわけではない。しかしながら、過去に生きた先人たちの言葉や生き方を知るに至っては、やはり、「生きている年月」の積み重ねが、しだいに成熟度を増しているように感じられるのである。

なお、人間は死ぬまで成長（身体ではなく、知性・感情・意志など心的要素）す

るという考え方が常識になりつつある。水口洋氏は、「人生の最後の最後まで、成長のための機会が用意されています。人格が磨かれていくチャンスが備えられているということです。それは、今この時点でわからないことがあっても、さらなる経験を重ねることでわかるという期待を抱かせてくれるのです」³⁾と述べている。

人生に完結はない。いつも、人生はその成熟に向けて進んでくプロセスをもち、^お「重ねてきたすべての経験が織りなす一枚の布のように、それぞれの人生が完成に向かって」⁴⁾輝き、進み続けるものとして考えることができるのである。

2-2. 成熟した人間の生き方とは

いったい、成熟した人間とは、誰のことだろうか。

上記にもしるしたように、広辞苑的に「成熟」という言葉の意味を厳密に規定するのは、かなり厄介な作業であることは明らかである。

しかし、科学的とも、論理的ともいえないかもしれないが、成熟した人間の生き方とはこのようなものかもしれないという、漠然とした、しかし、そこに学ぶべき人間の姿をみることができる。

宮沢賢治といえば、岩手県にある花巻町（現：花巻市）に生まれ、『注文の多い料理店』、『銀河鉄道の夜』、『グスコブドリの伝記』、あるいは『風の又三郎』など、少年の頃に一度は読んだことのある童話の作者である。

「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」という言葉も宮沢賢治の思想や理想を知るうえで欠かせない。「この世の人がみんな幸せになればいい」という、切なる魂の願いとも、深い祈りともとれるこの言葉は、誰もが経験できない宮沢賢治の葛藤や苦悩の中からの叫びのような気がしてならない。

だが、宮沢賢治という名を知らぬ者まで押し上げたのは、なんととっても、彼の黒い手帳に記された「雨二モマケズ」の詩である。（原詩全文は、漢字とカタカナで構成されているが、下記では、あえて漢字とひらがなを用いて表記した）。

「雨にも負けず」 宮沢賢治

雨にも負けず
風にも負けず
雪にも夏の暑さにも負けぬ
丈夫なからだを持ち
欲は無く

決して瞋^いからず
何時も静かに笑っている
一日に玄米四合と
味噌と少しの野菜を食べ
あらゆる事を自分を勘定^{かんじょう}に入れずに
良く見聞きし判り
そして忘れず
野原の松の林の影の
小さな萱葺^{かやぶ}きの小屋に居て
東に病気の子供あれば 行って看病してやり
西に疲れた母あれば 行ってその稲の束を背負い
南に死にそうな人あれば 行って怖^{こわ}がらなくても良いと言ひ
北に喧嘩^{けんか}や訴訟^{そしやう}があれば つまらないからやめろと言ひ
日照りのときは涙を流し
寒さの夏はオロオロ歩き
皆にデクノポーと呼ばれ
誉められもせず苦にもされず
そういう者に
私はなりたい

この「雨ニモマケズ」の詩について、「みなんに『デクノパウ』と呼ばれるような平凡人の、自己犠牲をおしまない精神に対する賛美とその境地に至りたいという賢治の祈願が語られている。」「要するに、深い人間愛によって現世での平和な静かな生活を希求しているのである」という専門家の解説をみることができる⁵⁾。

多くの読者がそうであったらと思うが、筆者も、若い時分はこの全文を暗唱していた。この詩にふれた時、なぜだか理由^{わけ}もわからず、自然に引き込まれて、いつの間にか頭を支配し、いつまでも居座ってしまう、単純で素朴で素直で、そして田舎の匂いがする不思議な魂の詩である。みずからの死を前にして病床で手帳にメモ書きしていた賢治の姿を思うと、なぜか悲しい。

それは、賢治の自己犠牲をもいとわぬという死を前にしての、高い精神性に支えられた覚悟を感じるからだろうか。底の深い純粹な強さ、愛とやさしさを備えた感動的な詩である。愛とやさしさ、そして自己犠牲は、成熟した人間の生き方のなかにあらわれるものであることは間違いないだろう。

成熟した人間の生き方のなかにあらわれる自己犠牲という点では、O・ヘンリのあまりにも有名な短編「最後の一葉（The Last Leaf）」⁶に描かれている老画家・ベアマン老人にまさる人間を探すのも容易ではない。

このベアマン老人は、ずんぐりした煉瓦づくりの三階建のてっぺんに住んでいるスウとジョンジーという若い画家の卵たちの階下に住んでいるが、この老人の紹介文は、ヘンリの創作とはいえ、さんざんである。

年は六十を過ぎていて、ミケランジェロが描いたモーゼ像に見るような髭が、半獣神のような顔から、小鬼のような体に、ちぢれて、たれさがっていた。ベアマンは芸術の落伍者であった。四十年間も絵筆を握ってきたが、芸術の女神の衣の裾に触れられるところまでも近づくことができなかった。いつも、口癖のように傑作を描くのだと言っていたが、ついぞ一度もそれに手をつけたことはなかった。

ご存じのとおり、「最後の一葉」では、肺炎を患い、窓の外にみえる一本の古い古い鶯のつるについている葉っぱを数え、すべての葉っぱが落ちた時、自分も死ぬと思い込んでいるジョンジーのために、このベアマン老人がつめたい雨が降りしきる夜、決して秋風でつたから落ちることのない一枚の葉っぱを絵筆で壁のうえに描くのである。結局、ジョンジーの肺炎は癒されるが、そのかわりに、老人のほうで、このことで肺炎を患いみずからのいのちを落としてしまう。

まさしく、みずからのいのちと引きかえに、画家としての最後の“傑作の一つの葉”を描いたこの老人は、その風貌と芸術家としての評価はどうあれ、確かに、老人の心は成熟した人間がもつ心ではないだろうか。

もし、ベアマン老人と同じ立場に置き換えてみずからの立場を思い描くと、はたして同じような自己犠牲としての行為ができるものだろうか。いや、これはあくまでヘンリが創作したストーリーであり、自分の人生の生き方まで踏み込んで深刻に悩むほどのことではない、と割り切るのもよいかもしれない。はたして、読者はどのような読後感をもつのだろうか。

葉室麟氏の時代小説『蝸ノ記』（平成23年度下半期 第146回直木賞作）⁷は、十年後の切腹を命じられている武士（戸田秋谷）の清廉な姿を鮮やかに描き、その死への覚悟に感動と涙する作品である。ここで、作品のあらすじを述べるわけにはいかないが、筆者は、生に執着することなく、たんとと使命を受け入れ、死から逃れようと、もがきもしない主人公・戸田秋谷のあっぱれな生き方に、成熟した人

間の姿を見ることができる。

人間は、与えられた時間をどのように生きるのか。どのように死に向かっていくのか。何を残していくべきか。いろいろな課題を突きつけられる名作である。

誰もが、成熟した人間として生きようとするならば、これまでの長い人生の生きざまを否定したり、ひどく後悔して、みずからを傷つけたりせず、成功の失敗も、ほまれ誉も恥も認めるだけのおおらかな内的成長を必要とするといえよう。

3. 「古い」を受けとめる ―老いるということ―

老いたからといって幸せからこぼれ落ちてはいけない。

空模様にも似た人生の後半から「古い」という領域に入るのは、誰でもない自分の〈生〉の完成に向けての新たなストーリーのスタート点に立つことと考えたい。

「そんな年で・・・」の次には、肯定的で利他の心への賞賛しょうさんの言葉も入れれば、肯定的で眉まゆをひそめたくなくなるような言葉もはいる。それは、まるで鉄道の路線レールの切り替えぶんぎ（分岐）にも似ているが、やはり、肯定的で、愛の内に利他の心をもって過ごしたいものである。

だが、「古いの現実」を理解し、老いを受けとめることは容易ではない。ある時、なにげなしに誰かのエッセイを読んでいたが、そこには、「死」の覚悟よりも、「古い」の覚悟のほうが、はるかにむずかしい」という文言がしるされていた。確かな、しっかりとした「古い」への自己認識がともなうことである。

長寿は、本来、神の祝福のしるしであるが、愚稿の冒頭の「諸言」でも述べたように、「古い」というのは、多くの人たちにとって、悲観的になりやすく、いわゆる「焦燥感」しょうそうかんに襲われる場合もある。

一般的に、青年期にはイキイキと活動し、仕事面でもバリバリと業務をこなして充実した人生を過ごしてきた人間が、職場を定年退職し、老齢期に入ったとたん、これまでの多くの活動や事柄を断念しなければならなくなる。「古い」とは、ある種の「人生の危機」ともいえる時期のことである。

すなわち、自分のいのちの時間に制限があり、身体にも限界があることをいやおうなく意識せざるを得ない。自分は一体何の役に立つのだろうか、何ら生産的な活動もせず、社会への貢献もしない自分が生きていていいのだろうか、と後ろ向きで悲観的な感情に襲われる時があるかもしれない。

筆者も還暦をすぎて、初めてわかったことだが、まず体の自由がきかない。若い時には平気でできたことがそう簡単にはいかない。若い時は、時間があれば、夕方

頃にマラソンをしていたが、いまでは、緊急の時以外は速足歩きである。中学時代は体操部に在籍し、床運動が得意で倒立はお手のものだったが、いま倒立などしようものなら、自分の体重を支えきれずに、数秒と待たないだろう。来週の大切な仕事のスケジュールも、手帳かカレンダーをみて確認しないと忘れそうになる。

それでも、実に不思議なことに、自分のパソコンのパスワードや銀行の暗証番号だけは、なんとか暗記している。実に、驚きの体験である。むろん、この体験を喜んでいるわけではなく、ただただ、情けなく、苦笑いしたくなる。

このように、自分の思い通りに身体も動かず、明らかに運動機能や忍耐力が衰え、物忘れもたびたび起き、あきらかに記憶力や計算能力などが低下していると感じるようになると、一種のあせりやむなしさがこみあげてくる。

ある本によれば、老年期に入り、朝早く目を覚まし、夜明けがくるのを布団の中でじっと待っている日々が続くと、いよいよ生きる勇気も希望もなくなり、社会から見捨てられていると勘違いしてしまう。生きるために楽しむことができなくなってしまうという。

心理学の専門家で作家のリチャード・カールソン（Richard Carlson）は『小さいことにくよくよするな！』⁸⁾という本を書き、この本は日本でも話題になった。

私たちは、小さな出来事も大きく扱い、時にはちょっとした問題やささいな悩みにも過剰反応して、大騒ぎする傾向がある。そして、それは年をとればとるほど、そのような悲観的で、否定的な傾向は強まるといわれている。「だれもが、しばしの期間、暗い谷間に入り込んでしまったようなうつ状態を経験している」⁹⁾のである。

しかし、その時は、とてつもなく大きな問題と思えても、後で振り返ると、ささいな出来事としか思えなかった、という経験は誰にでもある。人生に起きるすべての問題には、必ず、それを解決するドアが開かれているのであるが、それに気づくまで時間がかかることもある。そのような場合は、まず、これまでの歩みで痛めつけられ、傷つけられ、やぶれたセルフ・イメージ（自己像）を修復することが大切であるだろう。

俳優や司会者として活躍した故・児玉清氏は、著書『負けるのは美しく』の中で、老いに対する思いを次のように綴っている。「皮膚と肉が離れているような感覚。水槽の中に一人だけ別にいるような奇妙な現実感の無さ。すべての動作が社会から遊離してしまったような頼り無さ。声や主張を大きくすればするほど周囲から隔絶されていく思い。老いは孤独を強いらられるのだ」¹⁰⁾と。

アメリカの著名な心理学者であるウィリアム・ジェームズ（William James）は、

「人が社会的に放置されて、社会の誰にもまったく見向きもされないことほど残酷な刑罰は考えられない。われわれが入って行っても誰も振り向かず、話しかけても返事もなく、何をしようとも意にも介されず、会う人すべてが『そんな人は知らない』』と言い、まるでわれわれが存在しないかのように振る舞ったとすれば、憤懣^{ふんまん}と失望落胆が直ちに沸き^わ上がり、これに比べれば最も残酷な肉体の責め苦でさえも救いである。なぜなら、どれほど痛い目にあっても、まったく注意にさえ値しないというほどまでには落ち込んでいないと感じるからである」¹¹⁾と指摘している。

愚稿の冒頭の「諸言」では、人生の完成に向かって成熟していくプロセスの中で、「老い」というものが苦しみや悲しみ、孤独やいかりとして設定されているとすれば、それはなぜだろうか、という問いをしるした。

人生を成熟の時期に「老い」の時期がおかれていることについて、水口洋氏は著書『人生の四季の中で』において、次のように叙述している¹²⁾。

このことを考えてみることは、人間を考える上で重要な意味をもっています。すなわち、有能さや強さ、成功や名声が評価の基準であった社会のあり方から離れなくては、見えてこないものがあるのではないか。持つ、獲得する、所有するという価値観から離れなくては、本当の人間性は開花しないのではないか、ということを教えてください。

私たちの人生の集大成の時期に老いの苦しみが置かれているのは、この『人間性への気づき』という大仕事に取り組むためには、それまでの準備期間がいかに必要なのかということを示しているとも言えるでしょう。長い時間をかけて、自分が自分になっていくという成長の過程を通過してきた者だけが、その自分から離れていくことが可能なのです。

イギリスの政治家ベンジャミン・ディズレーリ (Benjamin Disraeli) は、「人は自分自身のことをいくらかでも知っていない限り、人類全体のことを何も知ることはできない」と述べている。

このディズレーリの言葉は、人間の全存在そのものへの理解の必要性について説いていることは明らかである。人間という存在は、いずれ誰もが老いていく。誰一人として老いない人間がいない以上、「人類」という表現をもちいたとしても、やはりいつまでも若いままの人類は存在しない。

いつしか、自分の心の中に、「若さ」に対する^{どうけい}憧憬がどんどんしみこんでいても、そのような^{あこが}憧れになんら^{みれん}未練を持たず、「老い」を受け入れながら、人間の本質的

部分を磨いていく必要があるといえる。「後半の人生におけるたび重なる喪失の現実を受け入れることだ。健康、友人、財産、権力の喪失を。苦痛ではあっても、この喪失によって新たな発達への道が開ける——それらは古い習慣をうち破り、予想外の発達のための余地を作る。そのプロセスにおいて、人は進んで無意識に入りこみ、若いときは堪えがたかった心理的問題と取り組まねばならない。年齢と経験が、昔の恐怖に対決する新たな力を与えてくれるはずだし、成熟の課題は、それらを成長のために役立てること」¹³⁾なのである。

かくして、ディズレーリの言葉を「人は自分自身の老いのことをいくらかでも知っていない限り、やがて老いていく人類全体のことを何も知ることはできない」といい換えることができよう。なんだか、幼稚な言葉遊びになってしまったが、要するに、「老いを知らずして、人とは何かを知らない」といいたいのである。

「老い」とは、本当の意味の自分と出会うための大切な機会といってよい。

人が本当の人間となり、自分がこの地上に生きている意味や死んでいく意味がわかる人は、幸せな人生といえるかもしれない。

山崎弘義氏の作品『DIARY－母と庭の肖像－』¹⁴⁾は、自分の認知症の母親と四季折々の庭の一隅を写した写真日記のような不思議な写真集である。死に向かいつつある母親の表情には、毎日違った表情が読み取れ、生きて死んでいく人間の姿が庭の植物たちとともに編み込まれている。この写真集を眺めていると、母親の顔に刻まれた皺は、自分の本当の姿そのものであり、生きた証を放っているように思われてならないのである。

この章では、「老い」を受けとめることについて、なにか取りとめもないことを考えてみたが、何よりも、大切なことは年老いて与えられる悩みや苦しみは私たちに“長くよく生きること”を期待している天地からのプレゼントだということだ。

「老いは天地からのプレゼント」。そのことを心から受け入れることができれば、間違いなく、立派に精神的に成熟した人間の仲間入りといえるのである。

4. 成熟に向かったの老いのあり方

4-1. 「老い」と精神的な成熟

老いても、人生をけっして見限らない。

老いてからの社会への貢献のひとつは、まず、それは一人ひとりが、あらためて自分自身とは何者かを知り、自分の身体とところを大切にし、いつも明るく、楽しく生きること、それもまた、成熟に向かったの老いのあり方といえるだろう。

なぜなら、悩み苦しみ、不満に満ちた心の人間が多ければ多いほど、そのような人間の集まりが、幸せになれるとは、とうてい考えられないからである。

そうなのだ。どんな状況、どんな場所におかれても、また、どんなに年齢を重ねても、自分は、誰よりも最高に輝く素敵な花と思うことが、精神的な成熟に向かつての老いのあり方の基本であろう。「孤独でなしに、他人を愛し、長い人生経験に基づき老いの知恵が輝くような生きかたをすることが望ましい」¹⁵⁾のである。

スイスの医師・精神療法家のポール・トゥルニエ (Paul Tournier) は、「医学の進歩のおかげで、どの国民も高齢者の数が増え続けている以上、老人の評価を根本から本質的に引き上げる必要が生まれて来ていると思います。しかしまた老人自身も、自分を引退してしまった大人とみなさずに、自分をもっと高く評価され得るような秘策を自分で発見すべきではないでしょうか」¹⁶⁾と意味深い、勇気に火をつける言葉を述べている。

日本人なら誰もが知っている日本民話の有名なひとつに、「花咲かじいさん」(「花咲かじい」とも)がある。

ある山里に心優しい老夫婦がおり、その隣に欲張りな夫婦が住んでいる。

優しい夫婦が傷ついた子犬(名前はシロとも、ポチとも呼ばれるが)をみつけて、わが子のように大切に育てる。ある時、この犬が畑の土を掘りながら、「ここ掘れワンワン」となくので、不思議に思いながらも、老人がその場所を鋤でほったところ、金銭(大判・小判)がザックザックと出てきたのである。それを喜んだ夫婦は、近所の人たちにも振る舞いをするのである。しかし、それをねたんだ隣の欲張り夫婦が無理やり犬を連れ去り、大判・小判を出させようと虐待するが、出てきたのは価値のないガラクタばかりだったため、欲張り夫婦は激怒して犬を殺してしまう。

可愛がっていた犬を失って悲しんだ老夫婦は、死んだ犬を引き取って庭に墓を作って埋め、風雨から犬の墓を守るため、そのかたわらに木を植えたところ、この木は短期間で大木に成長し、やがて夢に死んだ犬があらわれて、その木を切り倒して「臼」を作るように告げたのである。そこで、夫婦がそのようにして、臼で餅をつくとき、今度は臼から大判・小判があふれ出てくるようになった。

それを知った隣の欲張り夫婦は、再び臼を取りとげて餅をつくが、出てきたのは汚物ばかりだったため、無残にも臼をオノで打ち割って、薪にして燃やしてしまう。それを知った優しい夫婦は、せめて残った灰でもほしいと願い込み、それを土に埋めて大事に供養しようとしたところ、また死んだ犬が夢にあらわれ、桜の枯れ木に灰を撒いてほしいと頼み込む。

この言葉のとおり、桜の枯れ木に、「枯れ木に花を咲かせましょう」といいなが

ら、灰を撒いたところ、枯れたはずの木に桜の花が満開となり、たまたま、そこを通りかかったお殿様がこれに感動して、花を咲かせた老人にたくさんの褒美^{ほうび}を与える。今度は、それをうらやましく思った欲張り老人が、同じようにまねて灰をまいたところ、桜の花が咲くどころか、そこを通りかかったお殿様の目に灰が入ってしまい、無礼な振る舞いとして罰を受けるという物語である。

この民話は、江戸時代初期頃に成立したと伝えられているが、ひと言でいえば、心優しい老夫婦は幸せになり、欲張りな夫婦は不幸になるという、日本でよくみられる内容展開になっている。ポール・トゥルニエの言葉を借りれば、死んだ犬の夢のおつけとはいえ、桜の枯れ木に撒いた「灰」こそが、無欲の「秘策」といってよいだろう

そこで、やや冒険的ではあるが、この「花咲かじいさん」の物語を、筆者なりに成熟に向かっての老いのあり方という視点で、幾つか簡潔に考えてみることにしたい。

まず、第一に、生き物である犬、しかも傷ついた子犬をわが子のようにかわいがる、それは生きていくもの（いのち）への愛と尊重であり、精神的な成熟には何よりも求められる大切な要素である。

第二として、心優しい老夫婦は、その隣に欲張りな夫婦から散々な仕打ちを受けているにもかかわらず、一度として欲張りな夫婦を非難したり、悪態^{あくたい}をついたり、ましてや仕返しをしようとする行動がみられない。あくまで、予想外の悲しむべき事態に失望したとしても、それを悲しみつつも受け入れ、事態の対処にむかって行動を起こしている。

第三に、欲張りな夫婦は、いつも、隣の夫婦と比較してみずからの境遇^{きょうぐう}を評価しており、しっかりと自分たちの、いわゆる「アイデンティティー」（個性・独自性）が確立されていない。いつも、比較の中で自分たち夫婦の境遇をみてしまうために、常に隣の夫婦の境遇が気になるのであるが、成熟した人間とは、他人の人生との比較の中で自分の人生を評価したり、ましてや、他人の生活をねたんだり憎んだり^{にく}はしないであろう。

そして、第四として、老人が最初に^{くわ}金でほりあてた金銭（大判・小判）を自分たち夫婦だけのものとはせず、隣近所の人たちにも振る舞いをしているが、これは、後述するように、成熟に必要な「利他の心」のあらわれといえるであろう。

ロシアの偉大な作家トルストイの代表作のひとつ『人にはどれほどの土地があるか』¹⁷⁾では、主人公の農夫パホームが欲にかられて途方もない広大な土地を手に入れようと奮闘^{ふんとう}し、結局は倒れこんで、口からたらたらと血を流して死んでしまう。

死んだパホームは掘られた墓穴^{ほかあな}に埋められて、トルストイの作品は終わっているが、かりに、パホームが死に間に、「私が得た広大な土地を家族のほかに、ほしい人みんなに平等に分け与えてほしい」と遺言したとしたら、動機はどうあれ、パホームのいのちをかけた奮闘は無駄ではなかったといえよう。

むろん、このような結末は、偉大な作家トルストイの意図するところとは微塵^{みじん}も関係ない。筆者の空想的なたわごとであり、多くのトルストイ研究家たちの失笑^{しっしょう}をまねくことは疑い得ないだろう。

4-2. 成熟に向けて可能性を呼びさます

老いてもなお、“いま”置かれた場所で、きれいな花を咲かせる。

そのためには、さまざまなことにチャレンジし、「後悔」ではなくて、これまで描いていた自分の夢を夢で終わらせず、現実のものとするために心強く、幸せを感じながら歩む気持ちが必要であるといえないだろうか。

『葉っぱのフレディ ―いのちの旅―』の著者として、日本でもよく知られているアメリカ人のレオ・バスカリア (Leo Buscaglia) は、「私たちの生活は、くる日もくる日も同じことのくり返しだ。そのような生活からは驚き生まれるはずがない。大きな落とし穴もないから、いつも安心していられる。けれども、退屈を吹き飛ばし人間関係を活気づけてくれるのは、未知のもの、リスクのあるもの、そして予測のつかないものなどである。そういったものは可能性をいっぱい秘めている」¹⁸⁾と指摘しているが、このような安定的な、なんの変化もない日々の生活のあり方は、まさしく、老人の日常生活そのものではないだろうか。

人間の前向きなチャレンジ精神には、年齢などまったく関係もなければ、重要な要因 (ファクター) でもない。なぜなら、人間のもつ可能性に限界はないからである。もし、みずからの可能性を布団の中に入れたままにしているのであれば、すぐさま、眠りこけている偉大な可能性を呼びさますことが必要である。

とはいえ、老いてもなお、尽きない希望をもって生きることは、必ずしも、容易なことではないかもしれない。しかし、“歳をとったから、あきらめた” こともあるかもしれないが、“歳をとったからこそ、はじめられる” こともたくさんある。それは、年老いたからという理由で人生を投げ出さず、自分の人生を前向きに、積極的に、そして〈ていねいに〉生きるためにも必要であり、成熟に向かうあり方ともいえるだろう。

印象派の巨匠でフランスの画家クロード・モネ (Claude Monet) が、有名な「睡蓮」の連作を描きはじめたのは、60歳になってからである。クロード・モネは、86

歳で亡くなるまでに、視力がしだいに衰えていく中で、200点の「睡蓮」を描いたことはよく知られており、また、同じくフランスの画家マルク・シャガール (Marc Chagall) は、80歳前後に聖書からの連作を描きはじめている。

「ケンタッキー・フライドチキン」の創始者で、「カーネル・サンダース (Colonel Sanders)」として知られているハーランド・デーヴィッド・サンダース (Harland David Sanders) は、日本では、「カーネルおじさん」、あるいは、「ケンタッキーおじさん」の愛称が定着している。

サンダースは、アメリカ・インディアナ州のヘンリービルの町に生まれている。

サンダースが6歳の時に父親が亡くなり、学校を中学校で中退して働きはじめ、15歳頃の少年期から青年期にはさまざまな職業をわたり歩いている。電車の車掌を皮切りに、軍隊、消防士、保険外交員、タイヤ売り、さらには、ガソリンスタンドの店員などを経験している。

彼が40歳の時に、ケンタッキー州のコービンという町でガソリンスタンドの一角を借りて食堂コーナーを始めるが、1950年代に入ってから高速道路の開通で客の流れが変わり、店に客が入らなくなってしまう。そこで、店でも人気があったフライドチキンをワゴン車に積んで各地を回り、その調理法を教えて歩合をもらおうというアイデア商法 (世界初のフランチャイズ) を考えますが、これが、現在でいう「ケンタッキー・フライドチキン」のはじまりとなる。

結局、フライドチキンのチェーン店を成功させたのは、サンダースが65歳の時で、享年90歳で死去しているが、彼がチェーン店の仕事を始めてから営業のために走破した距離は40万キロ、世界を約10周する距離にあたるといわれている。

オランダ生まれのヘンリ・ナーウェン (Henri J. M. Nouwen) は、老いることの課題として、次のように指摘している¹⁹⁾。

年を重ねるごとに、私たちは型にはまった生き方をしようと、次のように言いがちです。「やれやれ、私はもう何もかも見てしまった。おてんとう様のもとには、もう何も目新しいものなどないさ……難しいことは言わず、その日その日を気楽に生きるんだ」。けれども、このような態度を取ると、私たちの生活から、新しく何かを生み出す健康な緊張は失われてゆき、何か新しいことが起こることを期待しなくなってしまう。皮肉っぽくなく、自己満足に満ち、ただ退屈した生き方をするようになります。

老いることの課題は、より大きい根気強さとより力強い期待をもって待つことだと思います。

確かに、老いてからのチャレンジは、“それは、簡単さ”と、口でいうほど単純でも、やしいものでもない。それは、多少なりとも、意欲と情熱と勇気が必要であることはいうまでもないことである。

しかし、せっかくのたった一度の人生を「^{すいせいむし}酔生夢死」、すなわち、酒によって夢心地のうちに、あたかも息をしていないかのように、ただぼんやりと無目的に死んでいくような老年期を送るのは、どのように考えても、いのちを大切にした生き方とはいえないだろう。それは、誰の目にも明らかなことである。

なお、まったくの余談であるが、筆者は、ときどき地域貢献の一環として、公民館やコミュニティ・センターなどで、地域住民の方たちを対象とした講座で講演や講話などを行うこともあるが、講演や講話の中で語る内容のほんの一部を紹介しておこう。

それは、通常であれば、“あの人は無欲な性格だ”という評価は、人間の生き方として望ましい美徳と考えられていることはいうまでもない。

しかし、筆者はあえて、講演や講話に参加される方たちに対して、すこやかに身体も心も健康で、100歳を超える人生のために、いつまでも“欲”を失わないことをすすめている。その“欲”というのは、〈食欲〉、〈意欲 (= チャレンジ力)〉、〈知識欲 (= 好奇心、探究心)〉、そして〈^{びよく}美欲〉という4つの健全で、迷惑なしの欲のことである。

4つ目の〈美欲〉という言葉は、まぎれもなく筆者の造語であるが、それは、目に見えない部分の美、つまり、心や魂の美しさへの欲、また目に見える部分のさっぱり感、清潔感への欲、といったところである。

4-3. 2つの「S」 —老いたものの奉仕と献身—

2つの「S」とは、何であろうか。

そのように、不思議に考える読者も多いであろう。2つの「S」とは、“Service” (奉仕) と “Sacrifice” (献身) のことである。

「奉仕」は、他者の痛みを思いやり、時には、困難や苦難な状況に置かれている他者に、報酬や見返りを求めずに手を差し伸べ、可能な限りの支援や援助を与えることとってよく、日常的に、地域社会でもさまざまな奉仕活動が行われている。一方、「献身」の方は、おうおうにして信仰的な用語と結びつけられることも多いが、一般的な社会的意味あいとしては、自己の利益を一切顧みず、他者のためにみずからのさまざまな能力 (^{たまもの}賜物) を用いることとして理解できよう。

ここでは、奉仕と献身を「利他の心」、すなわち、自分の利益よりも、あくまで

他者の尊厳と益を重んじ、報酬や見返りを求めずに他者の益を最優先に考えての考えや行動をおこすこと、と理解してみたい。すなわち、精神的な成熟には、「利他」という考え方が不可避であるということである。

イタリアの映画監督フェデリコ・フェリーニ（Federico Fellini）は、「この世には、何かの役に立っていないものなんかひとつもない。この小石だって役に立っている。空の星だってそう」という名言を述べている。

また、生前はカトリック教会の修道女であり、ノーベル平和賞受賞者としても世界的に知られるマザー・テレサ（Mother Teresa）は、次のように述べている。

人間にとってもっとも悲しむべきことは、病気でも貧乏でもない。自分は
この世に不要な人間なのだと思いますことだ。

年老いて、たとえ、社会の中で孤立していると感じ、自分の存在など無用だと感じた時、もう何ひとつ役に立つことがなくなってしまうと感じることがあったとしても、決してそんなことはない。

中国文学史上最高の唐代の詩人として有名な杜甫と並ぶ李白²⁰は、「天が私を生んでくれたのは、必ず世の中の何らかの役に立つためである」という。

人間は、不必要と思えるものを作ることがあったとしても、天地は、すべてを愛し、不要なものを何一つ創らず、価値のないものを生み出すことも絶対にはずである。

もし、“自分は、もはや不要な人間で、生きる価値などない” という、暗い牢獄に閉じ込められた思いにとらわれているとしたら、それは、たいへん皮肉であるが、立派な「勘違いグループ」の仲間入りといえる。この世の中に、私たちを愛し、私たちを必要としている人がいて、元気な笑顔と楽しい会話を待ちわびている人たちは、数知れないのである。

若い時は輝いていて、社会的に目覚ましい活躍をしていますが、年老いてからその輝きを消失して、毎日を孤独と後悔のうち過ごすとしたら、それは決して望むべき生き方といえないだろう。確かに、年老いて、若い時のように身体が思うように動かなくなると、行動も考え方も消極的になるのはやむをえない。しかし、若い時のような活躍は厳しいとしても、年老いたものは年老いたものとしてのそれまでの経験と知恵を働かせることのできる場面は、いくらでもある。

多くの人たちの役に立つために何をすべきか。それは、奉仕と献身ではないだろうか、と考えるのである。

あらゆる場面での奉仕と献身は、老いたところを陳腐化させるような考えを起こす危険物はすべて^{ほう}放り出し、^{くうきよ}空虚さの中へ無残にも落下するような気持ちを吹き払い、〈生〉の実感をイキイキと取り戻すことに大いに役立つのである。

さらに、奉仕と献身について、多少場面は変わるが、人間の内臓との関係で考えてみることにしよう。

私たち人間には、約200の臓器があるといわれている、その中でも〈^{かんぞう}肝臓〉という臓器を知らない方はいないだろう。

ご存じのように、何かをするのに最も大事なこと（様子）を「^{かんじん}肝腎」と表現するが、これは、人間の身体にとって肝臓も腎臓もともに欠くことのできない大切な臓器だからであることはいうまでもない。

順天堂大学医学部教授の^{ひのおきお}樋野興夫氏の説明によれば²¹⁾、肝臓は正常な時は、いわゆる、人間のように“ごちゃごちゃ”ということもなく、余分な細胞分裂もせずに、静止状態にいるというのである。つまり、黙って自分の役目（仕事）を果たし、血中を流れているたんぱくの80%は、この肝臓でつくられているという。

ところが、いったん、何事かが起こると、抜群の再生能力をみせ、手術によって3分の2を切除しても、ほぼ数週間でだいたい元通りに再生し、また、異物に対しても実に寛容で、^{げどく}解毒や^{だいしやきよう}代謝作用もあるという。つまり、体内の中で〈肝臓〉という臓器は、いつもはしづかに黙々と自分の大切な役割をこなし、いざという時には、頼もしい「正義の味方」となって、正常で健康な身体にするためのきわめて重要な役割を演じてくれるというのである。

樋野氏いわく、「美德とも言える不言実行と寛容性、肝臓は両者を兼ね備えています。人間も、この肝臓のような人になれば、きっと人格者としてうやまわれることでしょう。」「社会のがん化を防ぐには、ひとりひとりが人として生きる真の使命を自覚することから始め、役割を全うすることです。他者の個性を寛容に受け入れ、自分の主義主張よりもさらに大切なものがあると考えてみることです」と述べている。

肝臓は、別名、「沈黙の臓器」とも「黙す臓器」とも称されるほど、日ごろ身体の中の臓器として意識することはないが、すぐれた働きをする臓器の役割を知れば知るほど、成熟した人間としての生きるヒントを知ることができ、実に興味深く、学ぶべきものが数多くある。

むろん、目に見える奉仕と献身がかなわないような人生に恵まれていなかったと感じたとしても、老いた人生の価値がなくなるわけではない。輝くような見事な「生き方」とは、世界を揺り動かすような名声や業績をあげた人物のことではない。た

とえていえば、ローソクとでもいえようか。

誰もが知るローソクは、みずからの身体を燃やししながら、周りを照らし続ける。そして、みずからの身体が燃え尽きれば、あっさりとは何もし残さない。そこに、賞讃しょうざんも要求しなければ、報酬も得ようとしない。ただ、自分に与えられた役割を果たしただけの存在である。しかし、真っ暗闇さんぜんの中に燦然と輝くローソクの炎によって、沈んだ勇気が奮ふるい立たされたり、時には多くのいのちが助けられる場合がある。そのような生き方に、人は心を打たれ、誰もが厳肅げんしゆくな心もちになるであろう。

精一杯のあとの挫折、悲しみ、耐え難い苦しみ、絶望的な経験などが人間の品性をつくりあげる。『新約聖書』の「ローマ人の手紙」では、次のようにしるされている。「それだけではなく、苦難くなんさえも喜んでいきます。それは、苦難が忍耐を生み出し、忍耐ねんが練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと、私たちは知っているからです。この希望は失望に終わることがありません」²²⁾と。

アメリカの詩人ウォルト・ホイットマン (Walter Whitman) のよく知られた言葉に、「寒さに震ふるえた者ほど、太陽を温かく感じる。人生の悩みをくぐった者ほど、生命せいめいの尊さを知る」とあるが、それも、人としての成熟のための人生といえる。

誠実な奉仕と献身の炎が、多くの人々の困難な人生の道のりを照らし、豊かな人生へと導く輝く光となれば、老いた者の麗うるわしい生き方であるといえるであろう。それが、誰にも認められずともである。

5. 死にゆくものの覚悟とそなえ

5-1. 死と向き合い恐れずに人生を生きる

死とは、誕生と等しく自然であり、すべての人間に訪れる。

「しかし、素直な人間なら、誰しも、いつまでも生命を保ち続けたいという願望を持っている。秦の始皇帝が不老長寿の薬を求めた心理は、誰にも共通することである。しかし、それは、しょせんかなわぬ夢」²³⁾であるのだ。残念ながら、この夢だけは、カエルが小鳥たちのように空を飛ぶことを考えてみても、トンボが魚たちのように水中を自由に泳ぐことを考えてみても、まったくかなわないのと同じなのである。

生物学的視点から書かれた小林武彦氏の『生物はなぜ死ぬのか』の中に、「死はヒトだけの感覚」として、次のように述べている²⁴⁾。

事実、自身の命と引き換えに子孫を残す生き物、例えばサケは産卵とともに

に死に、死骸は他の生き物の餌となり、巡り巡って稚魚の餌となります。もっと直接的な例ではクモの一種であるムレイワガネグモの母グモは、生きているときに自らの内臓を吐き出し、生まれたばかりの子に与え、それがなくなると自らの体そのものを餌として与えます。まさに、「死」と引き換えに「生」が存在しているのです。

一方、ヒトの場合は少し複雑です。死に対する恐れは非常に強く、特に身内の死には大変なショックを受けます。

小林氏によれば、ヒトが死に対してショックを受けるのは、いうまでもなく、ヒトが強い感情を持つ生き物であるためである。特に、相手に同情したり共感する感情は、霊長類や大型哺乳類、鳥の一部にもみられるが、ヒトのそれは他の生き物より抜きん出て強い、と説明している。

知情意（＝知性・感情・意志）を持つ人間は何を思い、どのような姿でこの地上生涯を後にするのが「人としての姿」といえるのか。すなわち、死と向き合って人としてどう生きるか、まさしく、そこにこそ人間の真価が問われるとあってよい。

さて、普段から、人は必ず死ぬと、死を深刻に意識しながら日常生活を送っている人は少ないと思える。死を意識して、〈死後の世界体験ツアー〉でもあれば、参加したいと思う人は、どれだけいるだろうか。もちろん、このようなツアーを企画する旅行会社も存在していないが、人が死に向き合い、死に執着することなく、死と死後を恐れずに生きることができたとすれば、それは見事な「生き方」であり、成熟した人間の「死に方」ではないかと思う。

いまから、およそ40年ほど前に出版されたもので、ガン（前立腺ガン）を宣告された精神科医・西川喜作氏（故人）の残した『輝け 我が命の日々よ 一ガンを宣告された精神科医の1000日一』²⁶⁾という題名の闘病記がある。この闘病記は、死にいたる最後の三ヶ月をかけて書き遺した遺稿であるが、刊行された本の冒頭に、柳田邦男氏が西川氏について寄稿している。「読者はきっと、西川先生のこの遺稿を読むことによって、たとえ自分の人生が限りある短いものであることがわかって、こんなにも輝やかしく充実した日々を送ることができるのだという『希望』をつかむことができるに違いない。西川先生は、そういうことを伝えたかったのだと思う」と柳田氏はしるしている。

この本は、病を得てもなお、一日一日を密度濃く精一杯生きることの大切さとともに、それを「希望」として生きる「生き方」を知ることができる良書である。

イギリスの客船会社ホワイト・スター・ライン社が3年間をかけて建造した6万

トンの豪華客船タイタニック号は、1912年4月10日にイギリスのサウザンプトン港からニューヨークに向けて処女航海に出発した²⁵⁾。しかし、航海まもない4月14日の夜、ニューファンドランド島沖で巨大な冰山と衝突した。冰山との正面衝突は回避したが、船体に6ヶ所以上の亀裂が生じ、海水は前部の水密区画^{すいみつくかく}中、5区画に流れ出したのである。

タイタニック号は、16の水密区画のうち、どれか2区画^{はそん}が破損してもまだ船は浮くように設計されており、そのうえ、前部4区画まで浸水しても沈まないように設計された、まさしく「沈まない船」といわれていた。しかし、実際に破損したのは5区画であり、予想しがたい惨事^{さんじ}をむかえる。

『旧約聖書』の「詩篇」23篇は、別名、「詩篇中の詩篇」ともいわれており、世界中の人たちが慰め^{なぐさ}を得ている旧約聖書の箇所であり、いまにも沈もうとしているタイタニック号の船上で読みあげられた聖書の箇所としても知られている。

「詩篇」23篇には、「たとい、死の陰の谷を歩くことがあっても」という聖句がある。これは、「かりに、死の暗い谷間を通ることがあっても」という意味を示している。もう少しわかりやすく表現すれば、「たとえ、耐えがたいほどの激しい苦難や困難^{そうぐう}に遭遇しても」という意味内容である。

人間は、人生の中で、何らかの深い谷間を渡らなければならない時がある。そのような状況に遭遇した時にも、足を滑らせることなく深い谷間をわたる必要がある。タイタニック号が沈没する際には、『聖書』に親しんでいる欧米の多くの乗客がこの「詩篇」23篇すべてを暗証したか、旧約聖書のこの箇所を開いていたのではないかと想像し得る。

しだいに沈みゆく船尾の右舷甲板^{うげんかんばん}上でブラスバンドの楽団員たちが整列し、バンド・マスターのハートレイの指揮にしたがって、不安におののく乗客たちをはげますために、救援船を待ちながら、1時間半も演奏を続けた。この間にも、海水が船に流れ込み、氷のように冷たい海水がしだいに彼らの下半身をひたし始めた。

その時に演奏されたのが、聖歌260番（賛美歌320番）である。

主よ、みもとに 近づかん、
のぼるみちは 十字架に
ありともなど 悲しむべき、
主よ、みもとに 近づかん。
さすらうまに 日は暮れ
石のうえのかりねの

夢にもなお 天を望み、
主よ、みもとに 近づかん。

(1番～2番)

タイタニック号の周りに浮かんだ救命ボートからも、海に落ちた人たちからも唱和する声が聞こえてきた。そして、楽団員がかなでる聖歌（讚美歌）とともに、約2時間後に船尾を高くあげて沈んでいった。

タイタニック号に残った約1,500人にのぼる人たちは、その多くが男性たちであったが、ともに星をあおぎ、合唱しながら沈みゆく船と運命を共にしたのである²⁷⁾。

人間がこの地上生涯を終える時に何をするのか。それは、一人ひとり異なるだろうが、船の沈没によって、もはやこの地上を去ろうとした時、タイタニック号の甲板上の人たちやその周りの人たちが、その生死にかかわらず、聖歌をともに歌い、とりわけ船に残った人たち、そこには若年者もいれば老いた者もいたであろうが、一様に死を受け入れ覚悟のうちに、凍りつくような冷たい海水の中で、この地上生涯を閉じることとなった。

どんな状況にあっても、人間として、精一杯に毎日を生き、悔いのない、輝くような見事な「生き方」、そして誰からもその死を惜しまれるような、花のごとき美しく、清い「死に方」を、残されたものへプレゼントできたとしたら、それこそが愛に満ちた死といえるのかもしれないのである。

5-2. 愛に満ちた覚悟の死 一後に残されたものへのいつくしみー

「愛」とは、望みであり、みずからのいのちの犠牲をいとわない。

確かに、いのちのあるものの身体は消えゆく。だが、いくら科学が発展しても、人間の魂の不滅を証明することはできないであろうが、愛する〈いのち〉の連続性は説明できる。もはや、そのいのちが地上に亡くなったとしても、その人の情愛、その人のうるわしい生き方、そしてその人のそくせきが、その後はげに生きる人々を励まし、奮い立たせ、未来を生きる希望へとか駆り立てることを誰もが知っている。

アップル社 (Apple) の共同設立者の一人として世界的にその名が語られているスティーブ・ジョブズ (Steven Paul Jobs) が、2005年にアメリカ・スタンフォード大学の卒業式で行った感動的なスピーチは、故人となった今日でも、みずからが癌（すいぞう 膵臓癌）と宣告され、死と向き合った自身の経験に基づく、多くの人の魂を揺さぶるスピーチといってよいであろう。

このスティーブ・ジョブズの感動的なメッセージには、“自分はまもなく死ぬん

だ”という認識が、重大な決断をくださす時に、一番役立つ。なぜなら、死の前では周囲からの期待、プライド、失敗や恥をかくことへの恐怖など、これらほとんどが何の意味もなさなくなるからである。そこに残るのは、本当に必要なものだけなのだ、といった意味の内容がもり込まれている。

死は、人間に対して真に大切なことを語りかけてくるのである。死ぬからこそ、「一日」という日がこの上もなく貴重な時間であり、一日を無駄にせずベストを尽くして過ごすことがいかに重要なのかを教えてくれる。スティーブ・ジョブズは、2011年10月に、56歳でこの地上生涯を閉じたが、ジョブズの感動的なメッセージは、いまなお世界中の人びとに、人間の「いま」を奮^{ふる}い立たせる言葉として生き続けているのである。

また、いまから、35年以上前の出来事であるが、1985年8月12日午後6時56分、当時の日本航空123便、東京（羽田）発一大阪（伊丹）行きのジャンボジェット機が群馬県多野郡上野村の山中に墜落^{ついでらく}した。「日航機墜落事故」として一般に知られるこの航空機事故は、乗員乗客524名のうち、死亡者が520名、生存者はわずか4名という大惨事となり、社会全体にも大きな衝撃を与え、記憶にある方もおられるだろう。

故人となった渡辺和子氏が著書『心に愛がなければ』の中に、次のような記述がある²⁸⁾。

8月末つ方、19日付の山梨日日新聞の切り抜きが不意に送られて来た。それは日航機の事故犠牲者の一人で、21歳になる女子大生、富田真理さんの遺品の中に、私が書いた『美しい人に』の文庫本があったという報道記事の切り抜きであった。「墜落直前まで機内で読んでいたものでしょう。最後まで大事に握りしめていたのでは」というご家族の談話が書かれていて、私は深く心をゆさぶられた。

この事故はやはり、他人事ではなかった。一人のうら若い女性の、どんなにか苦しく、辛く、淋^{つら}しかったか知れない30分間、その傍ら^{かたわ}にあって死出の旅路の伴をした本、焼けこげて、5、6センチ四方の紙片2枚しか残っていなかったという。

同じように、非業^{ひごう}の死を遂げた父を持つという唯一の資格をたのみに、真理さんのご両親に書く慰^{なぐさ}めの手紙は、なかなか筆が進まなかった。

いまにも死にゆく若い女性が、最後まで大切に握りしめていた書物が、自分の執

筆した書物であったことを知った渡辺氏の気持ちは察して余りある。

渡辺氏は、渡辺教育総監の次女として旭川市に生まれたが、二・二六事件²⁹⁾の時に、父親は青年将校たちのピストルから発射された銃弾を全身に浴びて射殺された。

渡辺氏の父親の体には、銃弾43発が撃ち込まれ、軽機関銃にねらい撃ちされた片足は骨と皮を残すのみになっていたといわれる。その当時、渡辺氏は10歳にも満たない少女であった。渡辺氏は、自宅の物かげにかくれて、銃弾が撃ち込まれて死にゆく、愛する父親の姿の一部始終を見ていたという経験の持ち主である。

ひとりの若い女性のつらく苦しく、恐怖におののく中であってしっかり握りしめていたものによって、遺族は、本人がどんな人生を送ろうとしていたのか、後に残されたものはそれを知ることによって慰めをうけ、また、そのことがいつまでも、家族の、隣人の、そして誰かの心の中で生き続ける。そして、そのことがまた、他者の生きる大きな支えとなることだろう。

このことは、死に際して、傍らかたわに置くものはなにか。そんなことを、しみじみと考えさせられる出来事でもある。「老い」は、死を間じかに感じる。死が身近に迫っている老年期にいる人間にとっては、なおさらのこと、後悔のない死への覚悟とそなえ（準備）が必要である。

ヘンリ・ナーウエンは、みずからの著書の中で次のように指摘している³⁰⁾。

死について考える時、しばしば私たちは、死んだ後どうなるのかと言うことについて考えます。けれども、後に残された人々がどうなるのかということについて考えることのほうが、もっと重要なことです。私たちがどのように死ぬかは、後に残って生き続ける人々に深い永続的な影響を残します。恨みつらみに満ちた心持ちで死ぬよりは、感謝に満ちた別れを告げて死ぬほうが、家族や友人にとって私たちが喜びと平安の内に思い起こしやすいでしょう。

家族や友人たちに私たちが贈ることの出来る最高の贈り物は、感謝の贈り物です。私たちが感謝の心で別れを告げるなら、私たちがいなくなった後も、後に残される人々が、つらい思いや罪責感なしに生きていくことが出来るように解放します。

ユング派精神分析医のアラン・B・チネン（Allan B.Chinen）は、著書『大人のための心理童話』の中で、次のように指摘している。「人は永遠に生きられなくても、永遠に存在する何かを創りだすことができる、それによって、不滅を象徴する

ものを手に入れることができる。遺産の形式は人によってさまざまである。多額の金であるかもしれないし、科学的発見や文学作品かもしれない。あるいは、たんに子供たちを育て、幸福に必要とされる知恵と力を彼らに与えることかもしれない」³¹⁾と。

正解といえるものは何もないが、筆者としては、死んでもなお、後に残されたものの心の中に残され、生き続けることによって、後の世に残されたものに生きる力、勇気や希望を与え、社会にさえ何らかの影響を与えることのできるのは、「愛に満ちた死」でないだろうかと考えている。

その「愛に満ちた死」によってつくられた「種」が次の世代のために撒かれ、輝く〈いのち〉となって残り続けるはずである。

6. 結びに代えて 一結 言一

成熟した人間のあるべき姿としての無償の愛は、なんとも美しい。

みずからを犠牲にし、他者を生かすことができたとすれば、誰でもない、自分自身の存在そのものを「生きた証」^{あかし}に思える。それは、この地上に、みずからのいのちがある限りはいつでも可能だ。だが、そこからあとずさりしたくなくても、笑えはしない。

浜田廣介^{はまたひろすけ}氏の童話『ないた赤おに』にあるように、友人の赤おにのため、みずからを犠牲にして長い旅にでる青おにには、誰もがなれないかもしれないが、確かに、私たちの社会の中に、この青おにはいるのである。

日本語の文章には、ひらがな、カタカナ、漢字などいろいろな文字や数字などがあり、また、そこに句読点^{くとうてん}=句点（。）や読点（、）がある。

日本語の文章は、必要なところに、幾つかの句読点があるからこそ、文章の意味もとりやすく、内容の理解も進む。このことを長い人生にあてはめると、人生の場面ごとで、スムーズに思い通りに物事が進む時もあるれば、句点や読点が打たれて、すんなりと前進できない時もある。しかし、この起伏のある変化に富んでこそ、人としての人生も豊かで味わい深い、魅力的な“かおり”^{はな}な放つことになるといえる。

そのためにも、与えられた、みずからの大切な〈いのち〉を丁寧に扱い、“そのままの存在”としての自分を愛し、自分の個性を最も美しい思うことである。「いま（現在）」存在する一人ひとりの〈いのち〉には、「過去」に生きた人たちの大切な〈いのち〉が含まれ、また「未来」に続く、何にも代えることのできない〈いのち〉もやどしている、といえる。

変わりなく続く、この世の時のひとコマに、人の死はある。しばらくの老いの後に、逃れることのできない死が訪れるのである。

病気になること、聞いたことをすぐ忘れてしまうこと、老いること、死ぬことは、人生というもののすべての意味を考え思うことにあるのかもしれない。そして、〈生〉への執着を手放し、死ぬ間際に、みがからの死を安らかに受け入れることができたら、なんと素晴らしいことだろうと誰もが考えることであろう。

先に紹介した葉室麟氏の時代小説『^{ひぐらしの}蛸ノ記』の中で、「ひとが日々行っている営みは絶えることがなく続いていく。そうであってこそ、子が育ち、やがて新たな命も生まれる。ひとは老い、やがて死を迎えるが、変わりなくこの世は続いていく」³²⁾という文言がしるされている。

変わりなくこの世が続くためには、過去を乗り越えて、いま（現在）、そして未来を見すえて進んでいく、その日その日を精一杯に生き続けようとする人間の輝くいのちの営みが必要である。人の人生を悔いることなどないのだ。

いずれやってくる「死ぬ時」まで、多くのいのちの交わりの中で豊かな人生を楽しみ、そしてこころの豊かさを味わい、長い人生で得ることのできた英知、情愛、そしてさまざまな経験を次の世代に伝えていくことは、個々の人間にとっても、人の社会全体にとっても望ましいことであるだろう。

それでは、筆者みずからも、次の世代をより豊かにし、社会をよりよい場所にするために、あらためて、みずからに与えられたいのちを、限られた人生の時間を、どんな風に使わせていただくか、を希望のうちに考えてみたい。

老いと死を受け入れる心の準備を整え、死をどう迎え、「死を自分のもの」とするには、どんな死に方がよいのだろうか、を静かに考えてみたい。

後に残された者を限りなくいつくしみながらの愛に満ちたメッセージとし、何を残し、何を語ろうか、を深く深く考えてみたい。

人生という旅の風景は変化し続けている。

それは、死の間際の間際まで、つづきそうである。

[注]

- 1) 森村誠一『老いる意味 ―うつ、勇気、夢―』、岩波書店、令和3年、121頁。
- 2) 渡辺和子『置かれた場所で咲きなさい』、幻冬舎、平成24年、100-101頁。
- 3) 水口洋『人生の季節の中で ―『自分』との出会い―』、いのちのことば社、平成23年、253頁。
- 4) 同上書、243頁。
- 5) 福田清人・岡田純也『宮沢賢治 一人と作品―』、清水書院、昭和41年、174頁。

- 6) O・ヘンリ・大久保訳『O・ヘンリ短編集（三）』、新潮文庫、昭和44年。
- 7) 葉室麟『蝸ノ記』、祥伝社文庫、平成25年。
- 8) リチャード・カールソ著・小沢訳『小さいことにくよくよするな！』、サンマーク出版、平成10年。
- 9) ブレンド・ポインセット著・中嶋訳『うつになった聖徒たち』、CS成長センター、平成20年、229頁。
- 10) 児玉清『負けるのは美しく』、集英社文庫、平成20年、129頁。
- 11) ウィリアム・ジェームズ著・今田訳『心理学（上）』、岩波文庫、平成4年、249頁。
- 12) 水口洋、上掲書、163頁。
- 13) アラン・B・チネン著・羽田訳『成熟のための心理童話〔下〕』、早川書房、平成8年、117頁。
- 14) 山崎弘義『DIARY 一母と庭の肖像一』、大隅書店、平成27年。
- 15) 小林司『『生きがい』とは何か 一自己実現へのみち一』、日本放送出版協会、平成元年、193頁。
- 16) ポール・トゥルニエ・三浦訳『人生の四季 一発展と成熟一』、日本キリスト教団出版局、平成19年、147頁。
- 17) トルストイ・中村訳『トルストイ民話集 イワンのばか 他八篇』、岩波書店、昭和7年、73-103頁。なお、この民話集は、絵本としても各社から刊行されており、小学生以上の子どもたちにも読んでほしい作品である。
- 18) レオ・バスカリア著・草柳訳『愛するということ、愛されるということ』、三笠書房、平成9年。
- 19) ヘンリ・ナーウェン・河田訳『改訂版 今日のパン、明日の糧 一Bread for the Journey』、聖公会出版、平成27年、386頁。
- 20) 杜甫は先天元年（712年）～大歴5年（770年）まで存命し、「詩聖」と称され、一方、李白は、長安元年（701年）～宝応元年（762年）まで存命して、「詩仙」と称された。
- 21) 樋野興夫『いい覚悟で生きる』、小学館、平成26年、102-104頁。
- 22) 新日本聖書刊行会訳『聖書』（新改訳 2017）、いのちのことば社、平成29年、第5章3節～第4節。
- 23) 大原健士郎『生と死の心模様』、岩波新書、平成3年、191頁。
- 24) 小林武彦『生物はなぜ死ぬのか』、講談社現代新書、令和3年、163-164頁。
- 25) この豪華客船タイタニック号を題材としたジェームズ・キャメロン監督のアメリカ映画『タイタニック』（*Titanic*）は、1997年に公開されて大ヒットした。公開当時、映画史上最高の興行収入を記録し、1998年のアカデミー賞において最多の11部門を受賞している。
- 26) 小林司『『生きがい』とは何か 一自己実現へのみち一』、日本放送出版協会、平成元年、99-100頁。
- 27) 西川喜作『輝け 我が命の日々よ 一ガンを宣告された精神科医の1000日一』、新潮社、昭和58年。
- 28) 渡辺和子『心に愛がなければ 一ほんとうの哀しみを知る人に一』、PHP 研究所、昭和61年、76-77頁。
- 29) 昭和11年（1936年）2月26日に、陸軍青年将校が起こしたクーデター事件のこと。
- 30) ヘンリ・ナーウェン・河田訳、上掲書、292頁。
- 31) アラン・B・チネン著・羽田訳『大人のための心理童話〔上〕』、早川書房、平成7年、136頁。

32) 葉室麟、上掲書、68頁。

【主要参考文献】

- アラン・B・チネン著・羽田訳『大人のための心理童話〔上〕』、早川書房、平成7年。
アラン・B・チネン著・羽田訳『成熟のための心理童話〔下〕』、早川書房、平成8年。
アルフォンス・デーケン『新版 死とどう向き合うか』、NHK出版、平成23年。
ウィリアム・ジェームズ著・今田訳『心理学（上）』、岩波文庫、平成4年。
大原健士郎『生と死の心模様』、岩波新書、平成3年。
O・ヘンリ・大久保訳『O・ヘンリ短編集（三）』、新潮文庫、昭和44年。
児玉清『負けるのは美しく』、集英社文庫、平成20年。
小林武彦『生物はなぜ死ぬのか』、講談社現代新書、令和3年。
小林司『『生きがい』とは何か 一自己実現へのみち一』、日本放送出版協会、平成元年。
新日本聖書刊行会訳『聖書』（新改訳 2017）、いのちのことば社、平成29年。
トルストイ・中村訳『トルストイ民話集 イワンのばか 他八篇』、岩波書店、昭和7年。
西川喜作『輝け 我が命の日々よ 一ガンを宣告された精神科医の1000日一』、新潮社、昭和58年。
葉室麟『蝸ノ記』、祥伝社文庫、平成25年。
樋野興夫『いい覚悟で生きる』、小学館、平成26年。
福田清人・岡田純也『宮沢賢治 一人と作品一』、清水書院、昭和41年。
ヘンリ・ナーウエン・河田訳『改訂版 今日のパン、明日の糧 一Bread for the Journey』、聖公会出版、平成27年。
ポール・トゥルニエ・三浦訳『人生の四季 一発展と成熟一』、日本キリスト教団出版局、平成19年。
水口洋『人生の季節の中で 一『自分』との出会い一』、いのちのことば社、平成23年。
村上則夫『社会情報入門 一生きる力としての情報を考える一 [改訂版]』、税務経理協会、令和3年。
森村誠一『老いる意味 一うつ、勇気、夢一』、岩波書店、令和3年。
リチャード・カールソ著・小沢訳『小さいことにくよくよするな!』、サンマーク出版、平成10年。
レオ・バスカリア著・草柳訳『愛するということ、愛されるということ』、三笠書房、平成9年。
レンダ・ポインセット著・中嶋訳『うつになった聖徒たち』、CS成長センター、平成20年。
渡辺和子『心に愛がなければ 一ほんとうの哀しみを知る人に一』、PHP研究所、昭和61年。
渡辺和子『置かれた場所で咲きなさい』、幻冬舎、平成24年。

